

第2回教員の多忙化対策検討委員会 あいさつ

皆さん、こんにちは。今年度2回目となる教員の多忙化対策検討委員会ですが、委員の皆様方におかれましては、年度末が近づき、またコロナ禍での難しい対応もあり、たいへんお忙しい中をご出席いただき、誠にありがとうございます。

私は教員の勤務についての捉え方がいつの間にか大きく変わってきたと感じています。新採用教員として勤務した当時の高校の職員室は、定期試験中の午後、多くの先生が早めに帰っていたように思います。その一方、職員会議などは平気で延び、家庭訪問も夜になり保護者が在宅する時間を待つて頻繁に行いました。

勤務時間の管理という考え方は今ほど明確ではなかった、と明確な根拠はありませんが思います。試験中の午後のように、用がなければさっさと帰るのですが、帰ってからも、そして休日もいつも授業のことを考え、調べ物をしたり資料を作ったりします。勤務時間かどうかを意識しないことが、絶えず研修と修養に励むべきという、教員に求められる姿勢を支えているのではないかと思います。

私は高校時代、バス停に向かう帰り道で、担任の先生と時々一緒にになりました。「先生、今日は早いですね。」「今日は会議もないしね」。私は「会議がなければ帰ってもいいのか」なんて批判的なことは思わず、この大らかな雰囲気自分が高校の教員になったことの大きな理由の一つであったのでは、と思います。

教員の勤務は他の職種と足並みを揃えるようになりました。このこと自体は時代の流れで自然な成り行きなのでしょう。しかし教育は、社会に求められる人材をつくることよりも、まず先に人格の形成を目的としていると考えます。だからこそ教員には勤務時間の内外を問わず生活の全体を通じて絶えず研修と修養に励む姿勢が求められるのだと思います。

その姿勢を貫くことが自己の使命の自覚につながります。そして自己の使命を深く自覚するところにこそ教職の魅力があるはずです。物を作りあげる仕事を前提とした勤務時間の管理は、教員の勤務の実態にそぐわない部分もあるのかもしれませんが。そこはよく議論していく必要があります。

さて、本委員会では、教員の多忙化の分析とその対策について議論を進めています。新型コロナウイルス感染防止のための対応がこんなにも長期にわたるといふ今年度のきわめて特殊な状況は、教員の多忙化に一層拍車をかけ、その対策にじっくり取り組める環境になりにくい面もあります。

しかしそのような中でも、これからの学校教育のためには是非とも進めていかなければならない議論であります。本日は来年度からの4年間を期間とする新しい取組方針についての検討が中心になります。委員、そしてオブザーバーの皆様にはそれぞれのお立場から、また様々な視点から自由にご発言いただければ幸いです。よろしく申し上げます。